

価値あるロータリー活動を を続けていくために

「親善と平和の確立に寄与する」ことを目指した、国際ロータリー。先の見えにくい社会の中で、どのような役割を必要とされているのか、国際ロータリー第2525地区ガバナーに就任した菅原裕典氏が各界の第一人者に聞いた。

鼎談

対談シリーズ
第2回



2015-2016年度
国際ロータリー 第2520地区
ガバナー 菅原 裕典氏
1960年仙台市生まれ。2001年から(株)清月記社長。7月1日から宮城、岩手県の第2520地区ガバナー



地域ブランドを ともに上げていきたい

2015-2016年度
国際ロータリー第2520地区
ガバナー 菅原裕典



菅原 日本青年会議所(以下JCC)の岩手、宮城ブロック協議会の会長として、お一人とも半年過ぎました。活動や、またその思いなどをお聞かせ下さい。

大泉 被災した岩手県沿岸部や内陸部の会員と率直な意見交換をしてきました。陸前高田市の例会翌日に、市内の小学校を訪れたとき、小学生に将来の夢を聞きました。普通はプロサッカー選手になりたいとか言うのですが、「今の夢は、全力で駆けつきたい」と話すのです。被災地では、家庭は仮設住宅になり、住宅から学校まではスクールバスなので、同じ県内でも様々な問題があることを知りました。震災の風化を心配する前に、解決すべき問題が山積していますし、被災地に心を向けてやるべきことがまだまだあると思っています。

高橋 まず、宮城ブロック協議会会長となったことは、私も成長する機会を頂いたと考えていますし、私の巡り合わせだと思っています。大震災を機にJCCの存在価値を考えさせられました。しかし震災支援で、外から様々な団体やボランティアが活動している中で、回りから聞こえてくるのは、外から来るJCCやボランティアが頑張っているのに、地元JCCはさっぱり目立たないという声でした。自分たちもJCC会員として行動したいが、まず自分の会社を建て直さなければならぬし、社員とその家族も守らなければならぬ。この現実でした。被災地のど真ん中にあるJCCがやるべきことを考える時間でした。

震災前までは自分たちはどのような団体なのかという、本質を分からないままやっていたメンバーも多く

おりましたが、震災を契機に、青年会議所の本質を学び直し、青年会議所が存在しているから街が魅力的だと言われるように、理念や活動の本質を次の世代に繋いでいくことが大切だと思っています。

菅原 具体的な会員拡大策を考えていますか。またJCCの良さをどのように伝えていきますか。

大泉 自分の経験したことや感じたことを、自分の言葉で素直に伝えることが一番大事です。JCCの魅力の一つは、20歳から40歳までの年齢も職種も違う方々、様々な価値観と出会うということです。会員の多くは会社の経営層にある方です。会社内では叱られない方も、会議所に入ると会社でどんな位置にある方でも一会員として、指示されたり叱られたりします。これは面白い所です。日本青年会議所の柴田剛介第64代会

長は、「JCCは人生最後の道場だ」とおっしゃいます。まさにその通りだと思います。

高橋 会員拡大は喫緊の課題です。JCCは同じ世代の方々に様々な価値観に触れてもらうことで、想像力豊かな人を育み、当事者意識をもった方を増やしていくことが大切ですが、もう一つは女性会員の拡大です。社会が女性の社会進出を望む中で、家事も子育てもしない男性目線で声を大にして訴えても、分かってもらえません。女性が発信しやすい

環境づくりのために。女性が本音で話しのできる女性会を宮城で作っていきたくと話合っています。

菅原 いろんな考えや価値観をJCC活動の中で見させてもらうことだけでも財産ですよ。JCCもロータリーも様々な意見が出て、衝突する場面もあります。一つ形が決まれば、全員でしっかりやるうとなり。その過程がとても大切だと思います。

JCCは富裕層とか、特別な人が入る組織なのだからと思われがちです。決してそうではなく様々な人が入る組織です。そのためにはもっと表に出て、自信を持って活動することが、これからの時代は求められているのではないかと思います。

自分たちの地域が輝いていた、住みたい街にしたい、一度は行ってみたいという街にしたいのは誰もが思っています。それをJCCとロータリーと一緒にできれば、地域ブランドが上がっていくと思います。

大泉 街と自分を成長させたいという方であれば、どなたでも入会してほしいと思います。トップになれば、頭も良くなり知識も経験も豊富になると思っていました。会長を受けて分かったことは、自分で努力して頑張ることしかないということです。街や人づくりに貢献したいと入ってきますが、家族や会社は街が良くなっていかないと成長しないという風に気づきます。ここで自分

女性が発信できる 女性会を作りたい

公益社団法人 日本青年会議所
東北地区宮城ブロック協議会
会長 高橋 政則氏

1975年宮城県石巻市生まれ。
有限会社高橋建機工業(石巻市)専務取締役。
(一社)石巻青年会議所所属。



も修練しないとイケないと学びました。そこを一番訴えたいですね。

高橋 地元を根を張り商売をやらせてもらい、地元の皆さんに食べさせてもらっていることを考えれば、仕事もJCC活動も一緒です。皆さんはそこを分けて考え、損しています。仕事と思えば時間をいくらでも作りませんが、もっと仕事とJCC活動の距離を近づける機会をたくさん作ってほしいと思います。街に感謝すれば街に浸透した会社も作れます。

菅原 JCC活動の見返りは、多く

を学ばせてもらうことです。JCCの資産はメンバーなのです。お金に換算したらとつもない資産です。このように考えれば、あの人を入れて財産価値を高めていこうということにもなりますし、会員全員が共有できる財産になります。最後に、ストレス解消法とかを教えてください。

大泉 どんなに遅くまで仕事をしても飲んでいても、会社では毎朝朝礼があり、体調を常に整えていかないとイケません。JCCに入ると太るとか、家庭がうまくいかなくなる、と巷間では言われているのですが、私は逆にやせて体調が良くなり、今が一番人生の中でエッジが効いています。記憶力も良くなり、バランスが取れていると思います。

菅原 経営者として体を整えるために、暴飲暴食をしないで健康数値を良くしておくことは非常に大切です。仕事の原因です。社長が倒れたら路頭に迷うのは社員、その家族とお客さまなのです。

高橋 息子が一緒にサーフィンをやりたいと言いつつ、その時に息子と率直にいろんな話しをしていきます。海に行くことが今のストレス発散で、体調はとも良いです。

菅原 リーダーになる人は、つまりストレス発散法を持っていらつしやいます。仕事でもJCC活動でも夢中になることがストレス発散になります。今後ともご活躍を期待しています。

被災地 JC として 活動の本質を追究します

公益社団法人 日本青年会議所
東北地区岩手ブロック協議会
会長 大泉 勝嗣氏

1976年盛岡市生まれ。
アーケ(株)(盛岡市)専務取締役。
(一社)盛岡青年会議所所属。

